

情緒不安定性の類似が対人魅力に及ぼす効果

Effects of Similarity in Neuroticism on Interpersonal Attraction

戸塚 唯氏・上北 彰・狩野 勉

Tadashi TOZUKA, Akira UEKITA, and Tsutomu KARINO

Byrne & Nelson (1965) は、態度の類似性が、相手への好意度を増加させることを報告している。では、社会的にネガティブな特徴である情緒不安定性に関する類似も相手への好意度を増加させるだろうか。本研究の目的は、情緒不安定性に関する類似性が対人魅力に及ぼす影響を検討することであった。実験参加者は日本人大学生 130 名であり、独立変数は参加者の情緒不安定性（高・低）、参加者の性（男性・女性）、描写人物の情緒不安定性（高・低）、描写人物の性（男性・女性）であった。まず実験参加者に情緒不安定性に関する質問項目に回答させ、その後、4 人の描写人物に関する印象を測定した。分散分析の結果、情緒不安定性の類似が対象人物に対する好意を促進する効果は認められなかった。一方で、参加者の情緒が不安定なほど対象人物に対してよりよい印象を持つ傾向があること、情緒が不安定な女性描写人物よりも情緒が不安定な男性描写人物の方がよりよい評価を受けることが明らかとなった。

1. 問題

対人魅力の研究領域では、長い間類似性が好意度に及ぼす影響を検討してきた。例えば、Byrne & Nelson (1965) は、態度の類似性を取り上げ、被験者が自分と態度の類似している対象をより魅力があると評価したことを報告している。また藤森 (1980) は態度の類似性や話題の類似性を取り上げ、類似している対象をより魅力的に見えることを報告している。これらの研究から、人間は類似した他者を好ましく評価するという知見が得られそうに思われるが、一方で Ajzen (1974) は、他者が自分と類似した肯定的特

性を持っていると認知した場合に限ってその他者を好意的に評価すると主張している。すなわち、Ajzen (1974) は、自分のある特徴が好ましくないと思っているような場合、その特徴を持っている他者に対して好意を持たないと予測しているのである。Hendrick & Brown (1971) や中里・井上・田中 (1975) も類似した相手ではなく、社会的に望ましいと思われる特性を持った人を好意的に評価したことを報告している。他方、中村 (1984) は常に外向的な対象が好まれるわけではなく、「一緒にいて気が休まる」「長期の友人として信頼できる」などの側面では、内向的な被験者が内向的な対象を好ましく評価した（すなわち類似した特徴をもつ他者を好んだ）ことを報告している。戸塚・狩野・上北 (2005) は大学生被調査者の主観的類似感（高校生の頃の自分に高校生の対象人物が似ていると思うかどうか）に関する指標を利用した研究を行い、外向的な対象に対しては、内向的な被調査者と外向的な被調査者の間で好意度

連絡先：戸塚唯氏 t-tozuka@cis.ac.jp

千葉科学大学 教職課程

Professional Teaching Course, Chiba Institute of Science

(2010 年 09 月 30 日受付, 2010 年 12 月 16 日受理)

にあまり差がなかった（どちらも高い得点をつけた）が、内向的な対象に対しては内向的な被調査者の方が好意的に評価する傾向があったことを報告している。

上述のように類似性に関する研究結果はいまだ十分ではなく、類似性が好意度に及ぼす効果の有無を結論づけるには時期尚早であると思われる。この問題に関しては、さらにさまざまな側面から検討していく必要がある。例えば、

(1) 態度・性格・外見の類似性の効果はそれぞれ対人魅力にどのような影響を与えるのか、(2) それらの影響の方向性は同様なのか、(3) どんな相手でも自分と類似している部分と類似していない部分があるが、類似部分と非類似部分の比は対人魅力にどのような影響があるか、などである。このように多くの課題が残されているが、さしあたっては、より多様な性格特性における類似性の効果を検討する必要があると考える。

ところで、個人の全体的性格を明らかにする尺度としては Big Five 尺度 (和田, 1996) やエゴグラム (Dusay, 1977) が存在する。これらは人間の全体的性格を複数の側面からなるものとしてとらえている。例えば Big Five 尺度は外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性の 5 次元を、エゴグラムは Critical Parent (厳しい父親のような側面)、Nurtur Parent (やさしい母親のような側面)、Adult (合理的な大人のような側面)、Free Child (天真爛漫な側面)、Adapted Child (大人の言うことを聞く従順な側面) の 5 次元を提唱している。このように人間の全体的な性格が複数の側面から成っているものであれば、その側面ごとに類似性の効果を検討することが必要であろう。これまで類似性の検討は主に外向性の側面で検討されてきた (例えば戸塚他, 2005) が、今後は他の側面での検討も進めなければならない。

そこで本研究では、多角的に検討がなされてきた Big Five 尺度を利用して、外向性ではなく、情緒不安定性の側面で類似性の検討を行う。情緒不安定性というのは、Big Five 尺度が仮定する性格の一側面で、不安感を感じやすく、動揺しやすい側面のことである。情緒不安定性は一般的にネガティブな特徴であるが、そのような特徴における類似は相手への好意を促進するだろうか、それとも抑制するだろうか。Byrne & Nelson (1965) の研究結果から推測すると、情緒不安定性の類似は相手への好意を促進すると考えられるが、Ajzen (1974) や中村 (1984) の研究結果から考えると、情緒不安定性は社会的に望ましくない特性であるため相手への好意を抑制すると考えられる。本研究は社会的望ましさの影響は大きいと推測するが、性格特性の類似も好意的な評価を引き出すだろうと予想し、下記のような仮説を立てた。

仮説：情緒不安定性が低いという特徴は、社会的に望ましいものであるため、情緒不安定性が高い参加者も低い参加

者も、情緒不安定性が低い描写人物の方を情緒不安定性が高い描写人物よりも好ましく思うだろう。一方で、情緒不安定性が高い描写人物に対しては情緒不安定性の低い参加者よりも高い参加者の方がよりポジティブに評定するだろう。

なお、男性参加者と女性参加者では同じ対象人物に対して異なる評価をするかもしれない、また男性描写人物に対する印象と女性描写人物に対する印象も異なるかもしれない。そのため、本研究ではこれらの要因も独立変数に加え、4 要因 (参加者の情緒不安定性、参加者の性、描写人物の情緒不安定性、描写人物の性) の実験を行う。

2. 方法

参加者と実験計画

参加者は、千葉県内の日本人大学生 135 名であった (18 歳～21 歳)。このデータから、回答に欠損があった者 5 名のデータを削除し、分析対象者は 130 名 (男性 70 名、女性 60 名) となった。平均年齢は 18.52 歳 ($SD = .66$) であった。

本研究の独立変数は、参加者の情緒不安定性 (高・低)、参加者の性 (男性・女性)、描写人物の情緒不安定性 (高・低)、描写人物の性 (男性・女性) であった。前者 2 つが被験者間変数、後者 2 つが被験者内変数であり、 $2 \times 2 \times 2 \times 2$ の 16 条件を設けた。

実験手続き

実験は 2010 年 6 月に大学の講義時間を利用して集団実施した。まず刺激文と質問紙からなる冊子 (タイトルは「印象形成に関するアンケート」) を配布し、口頭ならびに小冊子の表紙の文章で教示を行った。なおその際には、①この実験への参加が個人の自由であること、②不参加であってもいかなるペナルティもないこと、③回答したくない項目には答えなくてよいこと、についても説明を行った。実験後にはデブリーフィングを行い、実験の目的や簡単な結果を開示した。

小冊子の構成

実験で用いた小冊子 (表紙を含めて A4 用紙 11 枚) は 6 つのパートから構成されていた。第 1 パートは参加者の情緒不安定性を測定する 12 項目から成っていた。第 2 パートは「架空の人物 A 君 (男性・中学 3 年生) に関する記述」と「A 君の印象を問う 8 項目」、「操作チェックのための 1 項目」から成っていた。A 君は情緒的に不安定であるように描写されていた (約 430 字)。補助資料 1 を参照。第 3 パートは「架空の人物 B 君 (男性・中学 3 年生) に関する記述」と「B 君の印象を問う 8 項目」、「操作チェックのための 1 項目」から成っていた。B 君は情緒的に安定しているように描写されていた (約 390 字)。補助資料 2 を参照。第 4 パートは「架空の人物 C さん (女性・中学 3 年生) に

関する記述」と「Cさんの印象を問う8項目」、「操作チェックのための1項目」から成っていた。Cさんは情緒的に不安定であるように描写されていた。Cさんに関する記述はA君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。第5パートは「架空の人物Dさん（女性・中学3年生）に関する記述」と「Dさんの印象を問う8項目」、「操作チェックのための1項目」から成っていた。Dさんは情緒的に安定しているように描写されていた。Dさんに関する記述はB君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。第6パートは人口統計学的データを採るための項目から成っていた。

ところで、本研究では中学生を対象人物として設定したが、その理由は、対象人物の年齢によって類似性バイアスの効果が異なる可能性があることを考慮したためである。一般的に、人は自分よりも年長者に対するよりも年少者に対して優しく接する傾向があるように思われる。そのため、自分と同じネガティブな特徴を持つ年少者に対しては好意を持つが、同様の特徴を持つ年長者に対しては好意を持たない可能性がある。このような推測から、年少・同年齢・年少の対象を設定して研究する必要があると考えられ、本研究では参加者よりも年少の中学生を対象とした。

質問項目

参加者の情緒不安定性 使用したのは、和田（1996）の Big Five 尺度において情緒不安定性を測定する 12 項目である。「悩みがちである」、「不安になりやすい」、「心配症である」、「気苦労が多い」、「弱気になることが多い」、「傷つきやすい」、「動揺しやすい」、「神経質である」、「くよくよしない」、「悲観的である」、「緊張しやすい」、「憂鬱であることが多い」という特徴に、それぞれ自分がどの程度当てはまっているかを 7 段階尺度で回答させた（まったくあてはまらない 1 点、非常に当てはまる 7 点）。これらの 12 項目の α 係数を算出したところ、.88 であった。このことから十分な内的整合性があると判断し、これらの 12 項目の平均点を参加者の情緒不安定性得点とした。得点が高いほど情緒が不安定であることを示す。

A～D さんへの印象 A～D さんに関する記述を読んで、参加者が A～D さんをどの程度好ましく思ったかを 7 段階で測定した（好ましくない 1 点、好ましい 7 点）。また「活発さ」「社交的」、「感じの良さ」、「親しみやすさ」、「意欲的」、「明るさ」、「おおらか」という特徴についても同様に測定した（点数が大きくなるほど当該の特徴が多くであると評定したことを示す）。

操作チェック項目 本研究では、A 君と C さんを情緒的に不安定に描写し、B 君と D さんを情緒的に安定していると描写した。実験参加者が実験者の意図どおりに認識したかを明らかにするために、当該の描写人物の情緒がどの程度安定していると思うかを回答させた（心が不安定である 1

点、心が安定している 7 点）。

人口統計学的変数 参加者の学年、性別、年齢、日本人であるかどうかを尋ねた。

3. 結果

各印象得点の平均と標準偏差

各実験条件の印象得点の平均と標準偏差を算出した（表 1）。

実験操作の適切性の検討

まず「参加者の情緒不安定性」の実験要因を作るために情緒不安定性得点を使って、参加者を二分した。情緒不安定性得点の中央値は 4.58 であり、これより得点の高かった者たちを「参加者の情緒不安定性高群」（ $n = 61$ ）、低かった者たちを「参加者の情緒不安定性低群」（ $n = 64$ ）とした。なお、その際にちょうど中央値の得点を示していた 5 名は今後の分析から削除することにした。そのため、これ以降の分析の対象者は 125 名（男性 67 名、女性 58 名）となった。情緒不安定性高群（ $M = 5.27, SD = .50$ ）と低群の情緒不安定性得点（ $M = 3.59, SD = .69$ ）を比較したところ、その差は有意であり（ $t(123) = 15.54, p < .01$ ）、「参加者の情緒不安定性」の実験操作が適切であることが確認された。

次に、「描写人物の情緒不安定性」の実験操作の適切性を確認するために、「描写人物の情緒不安定性高群」の操作チェック項目の得点（ $M = 2.78, SD = .87$ ）と「描写人物の情緒不安定性低群」の操作チェック項目の得点（ $M = 5.65, SD = .94$ ）を比較したところ、その差は有意であり（ $t(124) = 22.86, p < .01$ ）、「描写人物の情緒不安定性」の実験操作が適切であることが確認された。

印象得点に対する実験操作要因の影響

8 つの各印象得点に関して、4 要因の分散分析を行った。以下では 8 つの指標ごとに分析の結果を示すが、主効果と交互作用が同時に起っている要因に関しては、交互作用の結果のみ記述した（詳細な結果については表 2 を参照）。

(1) まず、主要な指標である「好ましき」については、参加者情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒不安定性が高い参加者ほど描写人物を好ましいと評定した。さらに「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性低群における描写人物性の単純主効果以外の 3 つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が安定している場合には、その描写人物が男性であっても女性であっても差はないが、描写人物の情緒が不安定であった場合には、その描写人物が男性であった方がより好ましいと評定されたこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がより好ましいと評定されたことを示す。なお事前に予測していた「参

表1 8つの従属変数の平均値と標準偏差

	H												L											
	男性						女性						男性						女性					
	H			L			H			L			H			L			H			L		
	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n	男性	女性	n
参加者情緒不安定性																								
参加者の性																								
描写人物情緒不安定性																								
描写人物の性																								
1.好ましい	4.58 (0.79)	4.19 (1.24)	26	5.50 (0.97)	5.50 (1.01)	26	4.71 (1.41)	4.60 (1.18)	35	5.80 (1.01)	5.74 (0.97)	35	4.42 (0.91)	4.12 (0.83)	41	4.98 (1.02)	5.22 (0.90)	41	4.26 (1.26)	3.74 (1.33)	23	5.35 (0.87)	5.30 (1.08)	23
2.活発である	2.73 (1.16)	3.08 (1.14)	26	5.35 (1.18)	5.50 (0.84)	26	2.89 (1.06)	3.23 (1.15)	35	5.31 (1.01)	5.69 (0.82)	35	3.07 (1.00)	3.22 (0.87)	41	5.05 (1.06)	5.27 (0.96)	41	2.74 (1.03)	3.04 (1.08)	23	4.87 (1.19)	5.22 (0.98)	23
3.社交的である	4.39 (1.04)	4.19 (1.21)	26	5.04 (1.29)	5.19 (1.00)	26	4.23 (1.20)	4.06 (1.09)	35	5.71 (0.85)	5.94 (0.86)	35	4.44 (1.01)	4.07 (1.02)	41	4.98 (1.12)	5.02 (0.92)	41	3.96 (1.27)	3.61 (0.92)	23	5.00 (1.18)	5.22 (1.18)	23
4.感じが良い	5.27 (0.86)	4.65 (0.88)	26	5.42 (0.93)	5.65 (0.96)	26	5.17 (0.97)	4.80 (1.09)	35	5.49 (0.77)	5.71 (0.85)	35	5.15 (1.07)	4.59 (0.99)	41	5.24 (1.01)	5.24 (0.82)	41	4.70 (1.08)	4.13 (1.23)	23	5.00 (0.93)	5.52 (0.93)	23
5.親しみやすい	5.00 (1.18)	4.23 (1.34)	26	5.35 (1.07)	5.46 (0.93)	26	4.63 (1.17)	4.63 (1.24)	35	5.71 (0.88)	5.94 (0.98)	35	4.71 (0.97)	4.24 (0.88)	41	5.32 (0.95)	5.20 (0.86)	41	4.35 (1.58)	3.65 (1.24)	23	5.04 (1.04)	5.26 (0.94)	23
6.意欲的である	4.65 (1.44)	4.31 (1.14)	26	5.73 (1.13)	5.65 (1.00)	26	4.77 (1.12)	4.46 (1.02)	35	5.97 (0.91)	5.80 (1.01)	35	4.51 (0.97)	4.24 (0.76)	41	5.34 (1.16)	5.42 (1.06)	41	4.17 (0.87)	3.96 (0.91)	23	5.61 (0.87)	5.57 (0.88)	23
7.明るい	3.42 (1.08)	3.46 (1.25)	26	5.85 (0.86)	5.65 (1.07)	26	3.80 (1.24)	3.74 (1.10)	35	6.23 (0.76)	6.17 (0.81)	35	3.68 (0.92)	3.73 (0.83)	41	5.37 (1.18)	5.42 (1.21)	41	3.48 (1.28)	3.44 (1.17)	23	5.61 (0.87)	5.48 (1.02)	23
8.おおらかである	3.58 (1.65)	3.73 (1.46)	26	5.27 (1.43)	5.27 (1.63)	26	2.51 (1.00)	2.54 (1.02)	35	6.23 (0.80)	6.14 (1.02)	35	3.22 (1.37)	3.27 (1.23)	41	5.20 (1.44)	5.15 (1.39)	41	2.61 (1.17)	2.70 (1.16)	23	5.65 (1.13)	5.22 (1.35)	23

注：表中の「H」は参加者情緒不安定性あるいは描写人物情緒不安定性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

表2 分散分析の結果

	F 値と多重比較				相互作用とその後の検定	
	I 参加者 情緒不安定性	II 参加者性	III 描写人物 情緒不安定性	IV 描写人物性	相互作用 の種類と F値	単純主効果の種類 多重比較
1. 好ましさ	10.03* H > L		84.42** L > H	4.41* 男 > 女	III と IV 10.94**	• 描写人物情緒不安定性B水準における描写人物性の単主 • 描写人物男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 描写人物女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 L > H L > H
2. 活発さ			437.95** L > H	24.23** 男 > 女		
3. 社交的	5.29* H > L		96.41** L > H		II と III 9.52**	• 描写人物情緒不安定性L水準における参加者性の単主 • 男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 女 > 男 L > H L > H
					III と IV 14.53**	• 描写人物情緒不安定性B水準における描写人物性の単主 • 描写人物男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 描写人物女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 L > H L > H
4. 感じの良さ	6.34* H > L		39.70** L > H	5.43* 男 > 女	III と IV 55.87**	• 描写人物情緒不安定性B水準における描写人物性の単主 • 描写人物情緒不安定性L水準における描写人物性の単主 • 描写人物男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 描写人物女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 女 > 男 L > H L > H
					I と II 4.12*	• 女性水準における参加者情緒不安定性の単主 H > L
5. 親しみやすさ	10.26** H > L		76.01** L > H	5.89* 男 > 女	III と IV 14.62**	• 描写人物情緒不安定性B水準における描写人物性の単主 • 描写人物男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 描写人物女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 L > H L > H
					III と IV 3.94*	• 描写人物情緒不安定性B水準における描写人物性の単主 • 描写人物男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 描写人物女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 L > H L > H
6. 意欲的	6.86** H > L		109.59** L > H	6.63* 男 > 女	I と III 4.39*	• 描写人物情緒不安定性L水準における参加者情緒不安定性の単主 • 参加者情緒不安定性H水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 参加者情緒不安定性L水準における描写人物情緒不安定性の単主 H > L L > H L > H
					II と III 17.18**	• 描写人物情緒不安定性B水準における参加者性の単主 • 描写人物情緒不安定性L水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 男性水準における描写人物情緒不安定性の単主 • 女性水準における描写人物情緒不安定性の単主 男 > 女 女 > 男 L > H L > H

注：表中の「H」は参加者情緒不安定あるいは描写人物情緒不安定の水準が高いことを、「L」は低いことを示す。「男」は男性水準、「女」は女性水準を示す。

注：「相互作用とその後の検定」欄におけるローマ数字は該当する実験操作要因を示す（表中2行目を参照）。単主は単純主効果を意味する。

注：「*」は $p < .05$ 、「**」は $p < .01$ を示す。なお、単純主効果の検定と多重比較に関する分析はすべて5%の有意水準で行った。

加者情緒不安定性と描写人物情緒不安定性の交互作用」は見いだされなかった。

(2) 次に「活発さ」については、まず描写人物情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、描写人物の情緒が安定している場合により活発だと評定された。また、描写人物性の主効果も見いだされた。描写人物が女性よりも男性の方がより活発だと評定されていた。交互作用は有意ではなかった。

(3) 次に「社交的」については、まず参加者情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒不安定性が高い参加者ほど描写人物を社交的だと評定した。また「参加者性と描写人物情緒不安定性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性高群における参加者性の単純主効果以外の3つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が不安定な場合には、その参加者が男性であっても女性であっても評定に差はないが、描写人物の情緒が安定していた場合には、女性参加者の方が男性参加者より社交的だと評定したこと、②参加者が男性であっても女性であっても、描写人物の情緒が安定している場合に、より社交的だと評定したことを示す。さらに「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性低群における描写人物性の単純主効果以外の3つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が安定している場合には、その描写人物が男性であっても女性であっても差はないが、描写人物の情緒が不安定であった場合には、その描写人物が男性であった方がより社交的と評定されたこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がより社交的と評定されたことを示す。

(4) 次に「感じのよさ」については、まず参加者情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒不安定性が高い参加者ほど描写人物を感じがよいと評定した。さらに「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、4つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が安定している場合には、その描写人物が女性の方が感じがよいと評定されたが、描写人物の情緒が不安定な場合には、その描写人物が男性の方が感じがよいと評定されたこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がより好ましいと評定されたことを示す。

(5) 次に「親しみやすさ」については、まず「参加者情緒不安定性と参加者性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、参加者が女性の場合、参加者の情緒不安定性が高いほど親しみやすいと評定した。さらに「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性低群における描写人物性の単純主効果以外の3つの単純主

効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が安定している場合には、その描写人物が男性であっても女性であっても差はないが、描写人物の情緒が不安定であった場合には、その描写人物が男性であった方がより親しみやすいと評定されたこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がより好ましいと評定されたことを示す。

(6) 次に「意欲的」については、参加者情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒不安定性が高い参加者ほど描写人物を意欲的だと評定した。さらに「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性低群における描写人物性の単純主効果以外の3つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が安定している場合には、その描写人物が男性であっても女性であっても差はないが、描写人物の情緒が不安定であった場合には、その描写人物が男性であった方がより意欲的だと評定されたこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がより意欲的だと評定されたことを示す。

(7) 次に、「明るさ」については、「参加者情緒不安定性と描写人物情緒不安定性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、描写人物情緒不安定性高群における参加者情緒不安定性の単純主効果以外の3つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が不安定である場合には、参加者の情緒不安定性が高くても低くても評定に差はないが、描写人物の情緒が安定している場合には、参加者の情緒が不安定である方がより明るいと評定したこと、②参加者の情緒が不安定している場合でも安定している場合でも、描写人物の不安定性が低い方がより明るいと評定したことを示す。

(8) 次に、「おおらか」については、まず参加者情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒不安定性が高い参加者ほど描写人物をおおらかであると評定した。さらに、「参加者性と描写人物情緒不安定性の交互作用」が見いだされた。単純主効果の検定によって、4つの単純主効果が見いだされた。この結果は、①描写人物の情緒が不安定な場合には、参加者が男性の方がよりおおらかであると評定したが、描写人物の情緒が安定している場合には、参加者が女性の方がよりおおらかであると評定したこと、②描写人物が男性であっても女性であっても情緒不安定性が低い方がよりおおらかだと評定したことを示す。

4. 考察

実験操作要因の影響について

参加者の情緒不安定性要因の効果 参加者情緒不安定性の主効果は8つあった指標のうち、7つで得られた。この結果は、参加者の情緒が不安定なほど、対象人物に対して

より良い印象を持つ傾向があることを示している。なぜこのような傾向があるのかは本研究のデータからでは明らかにできないが、情緒が不安定な人は、自分に自信がないためにその分だけ他の人を良く見るのかもしれない。この結果は本研究が予測していなかったものであるが、心理的に不安定な者の印象形成過程を考える上で非常に興味深い。今後、さらに検討を進めていく必要があるだろう。

参加者の性の要因の効果 全ての指標において、参加者の性の主効果は見いだされなかった。基本的に、参加者が男性であろうと女性であろうと対象人物への好意度はあまり変わらないといえることができる。参加者の性は評価に大きな影響を与えないことが示唆された。ただし、参加者の性の要因が関係する交互作用は2つ出ており、部分的にはその効果が認められた。

描写人物の情緒不安定性の要因の効果 全ての指標において描写人物の情緒不安定性の主効果が見いだされた。すなわち、情緒が安定している描写人物の方が、不安定である描写人物よりもずっと良く評価されていた。この結果は、社会的に望ましい特徴を持つ者が好まれるという Ajzen (1974) の立場を支持するものといえる。

描写人物の性の要因の効果 8つ中5つの指標において描写人物の性の主効果が見いだされた。うち4つの指標では交互作用が出ているので、結果の解釈は慎重でなければならないが(次の「交互作用について」の節を参照)、基本的に女性よりも男性の方がより好意的に評価される傾向があることが示唆された。

交互作用について 「描写人物情緒不安定性と描写人物性の交互作用」が8つ中5つの指標で得られた。この結果は、情緒が不安定な女性描写人物よりも情緒が不安定な男性描写人物の方が、よりよい評価を受けがちであることを示している。男性の方が、情緒不安定であることにに関してより社会から許容されやすいのかもしれない。逆に情緒不安定な女性は、よりネガティブに評価されている可能性がある。

仮説について 本研究では、『情緒不安定性が低いという特徴は、社会的に望ましいものであるので、情緒不安定性が高い参加者も低い参加者も、情緒不安定性が低い描写人物の方を情緒不安定性が高い描写人物よりも好ましく思うだろう。一方で、情緒不安定性が高い描写人物に対しては情緒不安定性の低い参加者よりも高い参加者の方がよりポジティブに評価するだろう』という仮説を立てていた。すなわち、参加者の情緒不安定性と描写人物の情緒不安定性の交互作用が見いだされると予測していた。しかしながら、このような交互作用は8つの指標中1つ(「明るい」の指標)でしか見いだされず、しかもその交互作用の形は予想とは異なるものであった。すなわち『情緒不安定性が高い参加者も低い参加者も、情緒不安定性が高い描写人物を同じ程度明るとして評価したが、情緒不安定性が高い参加者は低い参加者よりも情緒不安定性が低い描写人物をより明ると

評価した』のである。

本研究では全体的に特徴の類似によるポジティブな評価は見いだされなかった。仮説の前半部分(情緒不安定性が高い参加者も低い参加者も、情緒不安定性が低い描写人物の方を情緒不安定性が高い描写人物よりも好ましく思うだろう)は支持されたが、後半部分(情緒不安定性が高い描写人物に対しては情緒不安定性の低い参加者よりも高い参加者の方がよりポジティブに評価するだろう)は支持されなかった。この結果は、Byrne & Nelson (1965) などの立場よりも、むしろ Ajzen (1974) の立場を支持するものであったといえる。

今後の課題

本研究は情緒不安定性の類似が好意度を促進するという結果は得られなかった。ネガティブな性格特性に関しては類似していても好意度を促進しない可能性がある。今後、描写人物の年齢やその他の属性を変更した刺激を用いて追試を行い、確実な知見を構築していく必要があるだろう。なお本研究では小冊子において、高不安男子、低不安男子、高不安女子、低不安女子の順で実験参加者に提示した。このような提示順序が結果に影響を及ぼす可能性は小さいと推測するが、より正確な知見を得るために、今後提示順序をランダムにした追試を行うべきであろう。さまざまな追試を行うことによって、ネガティブな性格特性の類似が好意度を促進しないことが再度確認されれば、それは類似性研究の知見として重要なものになる。また本研究では、情緒不安定性の高い参加者の方が低い参加者よりも、描写人物を好意的に評価するという結果が得られた。社会的に望ましい対象を好意的に評価することは Ajzen (1974) の見解から理解できるが、それならば情緒不安定性の高い参加者と低い参加者で差はないはずである。情緒不安定性の高い参加者の方がより良い評価を下した理由は明らかではない。この点についても今後検討していく必要があるだろう。さらに、本研究では Big Five 仮説が提唱する情緒不安定性を検討したが、その他の開放性、誠実性、調和性といった性格特性についても検討をしていく必要がある(外向性については先行研究がある)。将来的には、5つの性格特性を同時に扱い、部分的な類似や全体的な類似の効果を検討していくことが重要である。

類似性の効果に関する知見は、教育場面やビジネス場面で非常に重要なものである。生徒の意欲に対する教員の評価や、部下の勤労意欲に対する上司の評価は適正なものではないが、もし類似性の効果が存在し、その効果が大きいのであれば、自分とよく似た相手を無意識のうちに実際よりも良く評価しているのかもしれない。類似性の効果が実在するのかどうかについてはまだ結論を出すことができないが、より適正な評価を実現していくためにも類似性に関する研究は重要である。

引用文献

- Ajzen, I. (1974). Effects of information on interpersonal attraction: Similarity versus affective value. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 374-380.
- Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 659-663.
- Dusay, J.M. (1977). Egograms: How I see you and you see me N.Y.: Harper & Row [新里里春訳 1980 エゴグラム 創元社]
- 藤森立男 (1980). 態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果—魅力次元との関連において— 実験社会心理学研究, **20**, 35-42.
- Hendrick, C., & Brown, S. R. (1971). Introversion, extroversion, and interpersonal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 31-36.
- 中村雅彦 (1984). 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **27**, 121-130.
- 中里浩明・井上 徹・田中国夫 (1975). 人格類似性と対人魅力—向性と欲求の次元— 心理学研究, **46**, 109-117.
- 戸塚唯氏・狩野 勉・上北 彰 (2005). 年少者に対する評価における類似性バイアス 国際教育研究所紀要, **15**, 17-27.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **58**, 158-165.

補助資料1 A君に関する描写

A君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。成績は中程度であり、スポーツも不得意ではありません。クラスで目立つ存在ではありませんが、友人たちからそれなりに好かれています。担任の先生や両親は、A君のことを比較的おとなしい性格だと思っているようです。

そんなA君ですが、友人関係において繊細な一面をもっています。友人たちと意見が合わない则自分の意見に自信が持てなくなり、ちよつと不安になってしまいます。また、友人から自分のちよつとした行動を批判されると、長いこと悩んでしまいます。

また最近、A君は進路についても悩んでいます。理科が好きなので、高校は普通科ではなく、理数科に行きたいと思っているのですが、自分の能力では授業についていけないのではないかと考えてしまいます。理数科でドロップアウトしてしまう可能性を考えると怖くなつてしまい、眠れないこともあります。「なんとかする」と自分を奮い立たせようとしますが、しばらくするとまた弱気になってしまいます。

補助資料2 B君に関する描写

B君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。成績は中程度であり、スポーツも不得意ではありません。クラスで目立つ存在ではありませんが、友人たちからそれなりに好かれています。担任の先生や両親は、B君のことを比較的おとなしい性格だと思っているようです。

そんなB君ですが、いろいろな友人をもっています。友人たちと意見の合わない時もありますが、「みんな違う個人なのだから、意見が違つていて当然」とあまり気にしません。友人から自分の行動を批判されることもあります、あまり長く悩んだりしません。

また最近、B君は進路についてもいろいろ考えています。理科が好きなので、高校は普通科ではなく、理数科に行きたいと思っているのですが、自分の能力では授業についていけないかもしれないと悩むこともあります。ただ今から悩んでも仕方ないし、「努力すればきつとなんとかする」と前向きに考えています。

Effects of Similarity in Neuroticism on Interpersonal Attraction

Tadashi TOZUKA, Akira UEKITA, and Tsutomu KARINO

Professional Teaching Course, Chiba Institute of Science

Byrne & Nelson (1965) reported that similarity of attitudes promoted attraction toward object person. So dose the similarity of neuroticism considered as a negative trait promote attraction of object person? The purpose of this study was to examine the effects of similarity in neuroticism on interpersonal attraction. Participants were Japanese university students ($N = 130$). Independent variables of this study were participant's neuroticism (high and low), participant sex (male, female), described person's neuroticism (high and low), and described person's sex (male, female). After responding to neuroticism questionnaires, participants evaluated attractions of 4 described persons. The results of ANOVA showed following facts. 1. Similarity of neuroticism did not promote attraction of described person. 2. High neuroticism participants evaluated described person more attractively than low neuroticism participants. 3. Described male person with high neuroticism was evaluated more attractively than described female person with high neuroticism.